お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
山本千枝子	女　性	８４歳 H27.8.15 現在	１４歳	黒　田

「海軍工廠　～　生死を分けた防空壕」

昭和２０年（１９４５年）当時，私は新城市東新町に住んでいて，愛知高等実修女学校（現在の豊橋中央高校）に通っていました。空襲の時は２年生でしたが，学徒動員は昭和１９年の夏から始まりました。実修女学校の１，２年生は豊川海軍工廠へ行くことになり，私は火工部第２弾丸工場に配属されました。２年生になってから異動があり，その日は第２弾莢洗滌場の中で弾丸を検査，選別していました。８月７日の出来事は，今も脳裏に焼き付いています。

その頃は，戦局がどんどん悪くなっていました。空襲警報が出されると，防空壕へ避難することになっていましたが，生産が間に合わなくなってくると空襲警報が出ても退避させてくれないこともありました。運命の８月７日，私がいた第２弾丸工場では退避命令はなく，何の前ぶれもなくやってきました。

弾丸の防湿作業の様子
提供：桜ヶ丘ミュージアム

突然，工場の機械が一斉に止まり，みんなが走って外に出始めました。私は出口に近いところにいました。外に飛び出ると，Ｂ２９が一宮の方から押し寄せ，爆弾がギラギラ光って落ちてくるのが見えるのです。私は，３機編隊で一番最初に来た９機だけを見ました。整列する暇もなく，みんなは決められた防空壕へ走りました。私はとっさに，すぐ近くにあった防空壕へ飛びこみました。入るとすぐに，「ドッカーン！」とものすごい音と地ひびきがして爆弾が落とされました。「ガガーッ！ザザーッ！」と爆弾が落ちてくる音が次々と聞こえます。私は父親に教えてもらったように，目と耳を両手でふさぎ，お腹を丸めて小さくなっていました。私が飛び込んだ防空壕に，火の玉が入ってきました。監視穴という外が見えるようになっている穴から火が入ったのです。工員さん達はみんな「ナンマイダブツ，ナンマイダブツ」と念じていたので，私もいっしょに言いました。防空壕はおよそ２０人ぐらいが入れる大きさで，工場の入口の角地にありました。

クラスのみんなは，少し先にある指定されていた防空壕に入りました。私はその防空壕へ行こうと思いましたが，「ドッカーン！」というものすごい音と地ひびきで，恐くてとても出られませんでした。空爆が終わるまで，一歩も外に出ず，

耳をふさいで小さくなっていました。いつ頭の上に落ちてくるだろうと思うと，ガチガチ体が震えて止まりませんでした。

３０分足らずの空爆だったと後で分かりましたが，その時は恐ろしく長い時間に感じました。空爆の音が静まってしばらくすると，「出てこい！」と男性の声がします。防空壕から出ると，同級生の友だち一人だけいました。その子と手を握って「よかったね。おそがかったね。」と喜びました。

工員の方に「付いてこい！」と言われ，ガタガタ震えながら後ろをついていきました。まわりを見ると，あれだけあった建物が一つもなくなって，真っ平らになっていました。引き込み線の線路や貨車の車輪が真っ赤に焼けていました。爆弾で破壊されたものがいっぱい散乱していました。途中で人が亡くなっているのを見かけましたが，私は恐くて恐くて，とにかく前を走る人の頭だけを見て走りました。足に地がついていないというか，宙を浮くような感覚で走っていました。

北東門を出てからなのか，イモ畑の所まで来ると，「あとは自分たちで帰れよ。」とその工員さんが言われ，私たちは解放されました。足元を見ると，イモ畑なのにツルがなくなっていました。それほど大勢の人が踏んづけて逃げたのでしょう。ほんのわずかな時間に，あれほどたくさんの建物が建ち並んでいた工廠が，焼け野原になったんです。２５０キロ爆弾の恐ろしさを思い知らされました。

私は何とか豊川駅まで行き，電車に乗って家に帰りました。私の姉も海軍工廠の正門近くの会計部に勤めていましたが，幸い難を逃れ先に家に帰っていました。「ものすごい爆撃だったから，千枝子はきっと死んじゃっただらあ。」と話していたそうです。私の顔を見るなり，母と姉が駈け寄ってきました。土やほこり，汗と油で汚れた私の手を取り，抱きしめて喜んでくれました。「ああよかった。生きてて本当によかった。」こんなに喜びをかみしめたことはありませんでした。姉は，「氏神様にお参りしよう。よくお礼を言わなくっちゃあ。」と私を誘いました。

翌日の８月８日，いつものように海軍工廠へ行きました。朝礼がありましたが，「学徒は帰れ。工員は残れ」と指示がありました。空襲のことについて何の説明もありませんでしたが，友だち同士の話で，私たちが指定されていた防空壕に爆弾が直撃したことが分かりました。同じクラスの２３人が亡くなったのです。

光学部事務所付近の防空壕
提供：桜ヶ丘ミュージアム

私たちのクラスは二つの防空壕に分かれ，半数ずつ避難することになっていました。私は直撃された防空壕に入ることになっていましたので，２３人の一人として名簿から名前が消され，犠牲者とな

っていました。他の防空壕から一人，私たちが指定された防空壕に入っていたので人数が合ったのです。その子は，私と同じ学校の同級生で福井八重子さんでした。八重子さんは，最初もう一つの防空壕に入っていたんですが，「何だか爆弾が落ちそうで恐い。」と言って，私が入るはずの防空壕に移動したのです。

そのまま動かずにいれば命が助かったのに，移動したばかりに命を落としたのです。私はすぐ近くの防空壕に入ったため，一人だけ助かったのです。ずるかったかもしれませんが，それが生死を分けたのです。運命の選択となったのです。何ということでしょう。八重子さんは一人娘だと聞きました。

○　６年後の供養

仲のよかった友だちが大勢亡くなりました。新城からは同級生が５人，愛知高等実修女学校へ通っていました。東新町から私，新城駅から二人，野田城から二人乗りましたが，そのうちの二人が亡くなりました。守屋民子さんと山本廣子さんです。私たちは東新町発が６時４０分ぐらいの電車で通っていました。奥から乗ってくる女工さんがいっぱいで，私たち学徒は体が小さいので，いつも押しつぶされそうになっていました。それでも帰りは，いっしょにおしゃべりをするのが楽しみでした。クラスの友だちとの楽しい思い出もいっぱいあります。そんな友だちが，一瞬で２３名もいなくなってしまったのです。

その時は，真夏の暑い日で遺体の腐敗が進むことや火葬施設が不足したため，友だちは諏訪に急きょ造られた墓地へ仮に埋葬されました。それから６年後，きちんと埋葬するために発掘が行われることになりました。遺体はほとんど白骨化し，埋葬された遺骨で氏名が判明したのは，１割程度だったそうです。愛知高等実修女学校の供養塔が建立されることになり，その除幕式で私が弔辞を読ませていただきましたが，どうしようもないほど泣けてしまって，上手に読めませんでした。

８月７日は一生忘れられない日となりました。今でも供養塔に行くと，友だちの名前を指でなでてきます。亡くなった子たちの顔が，目に浮かんでくるのです。

諏訪墓地のある
愛知高等実修女学校の慰霊碑

○　若いみなさんへ

我慢の大切さ，質素倹約に勝るものはありません。それさえできれば，困ることはありません。私たちの時代はそれが当たり前で，苦しいこと，我慢することは何ともありませんでした。事の善し悪しは分かりませんが，人間形成においては，よい時代だった考えるようにしています。何よりも，「戦争をしない，戦争を絶対に避ける」ことは守っていってほしいです。「戦争は殺し合い」なのですから。